

龍源寺報

孟蘭盆号

臨濟宗・妙心寺派
住職 松原信樹
佛母寺住職 松原覚樹
正福寺住職 松原行樹
TEL 3451-1853
FAX 3451-6094

振込 00160-0-104918

東京都港区三田5丁目9-23 (郵便番号 108-0073)

Email: info@ryugenji.com

URL: <http://www.ryugenji.com>

孟蘭盆會におもう

生命の問題について、一般的な仏教の教義では、人間をはじめとする生き物の生と死は、意識のあり方と密接に関係している。人間の意識は、誰でも、瞬間に変化しながらも、ひとつの流れとして身体とともにあり、人の一生の終わりとは、その流れの断絶するときで、その瞬間を、仏教では、死有といわれている。禅宗では扱わない、チベット系仏教などの輪廻転生の考えでは、亡くなった人は、前世の行為に応じて、新しい生を受け、その新しい生を受けた瞬間を生有といい、死有と生有の中間を中有というが、これは意識より成立され、目に見えない身体をもち、香りを食して、四十九日の間、生存すると言われている。この中有は四十九日以内に男女の交わりを縁として母体に入り込み生有となり、母体の中で成長して十ヶ月後に出産する。新しい生命は、中有が母体に入って生有となったときに始まるのであって、母体から出た時にはじまるのではないのである。

私たちは人の死後、葬儀を終え、本来、七日、七日に法事を行い、四十九日の法要で一旦打ち切るのも、その間に新しい生命が芽生えているか

らである。このように、新しい生命が受胎の瞬間に始まっている以上は、墮胎が殺人に他ならないことは言うまでも無い。そして、伝統的に仏教は、意識の流れの断絶を死と考えているから、脳死は、人の一生の終わりと考えられる。

生命の問題について、ヨーロッパのキリスト教社会では、宗教者が医師や倫理学者と共に議論をするが、日本の社会では、仏教の僧侶は、この問題について、議論を回避する傾向が強いように思われる。それは、決して僧侶が怠けているのではなく、現代における生命の問題が、輪廻転生などの伝統的な仏教の教義に疑問を突きつけることになり、仏教者が、その対応に苦しんでいるからなのではないだろうか。現代社会に生きる人間が、知性を具えながら、しかも、自分の心に矛盾を感じることのないような宗教を持つとすれば、それは、一体どのようなものであろうか。禅は、それに応える力が大いにあると思う。

釈尊が約二五〇〇年も前から、心や縁を問題にしてきたにもかかわらず、二五〇〇年経った現在でも、人間の心は解明できないし、縁についても解らないことだらけである。私たちの身の回りには、解らないことが多すぎる。これからも謙虚に、今・此処・自分を生きていきたいと思う。

経蔵寄付

金一千万円也 新庄初枝殿

金三百万円也 泊龍子殿

金五万円也 鎮目大三殿

金三万円也 武内隆幸殿

金三万円也 勝田明子殿

金一万円也 松尾真一郎殿

寄付（お寺の水回りなどの修繕に）

金五百万円也 後藤千恵子殿

ありがとうございました

＊将来は、本堂の裏地を整理して、大般若経を納める経蔵を建立する計画をしております。

ウラボン法要

一、七月十日（金曜日）午前十一時から

一、法話

一、斎座

・新盆の法要を行います。

・ご家族そろってお参りください。

新刊のご案内

野口善敬・松原信樹 訳注

『中峰明本「山房夜話」訳注』

汲古書院 定価八千円＋税

龍源寺の歴史について(二)

松原 泰道

福沢諭吉先生は、中津の奥平藩の藩士でしたから、江戸に塾を開く前に、当寺で数名の弟子を教えておられました。中津藩の江戸の寺であつたため、古いお檀家はすべて中津藩の人たちで、また福沢門下がたくさんおいででありました。(奥平家の江戸屋敷の寺は当寺の外に品川に清光院があります。)

故老の福知宜一翁のお話によると、文久二年(一〇三年前)の頃、奥平昌服公が上屋敷の東御殿を寺に寄進されたのが、現在の寺の建物の一部だそうです。更に当事、オランダ座敷といわれた中屋敷の建具が寄進されて共に現存しています。

この建具は、その頃ならモダンを誇ったものと思われませんが青いペンキ塗りで、骨も太くハシゴにも

なりそうな丈夫なものです。張り替えにはノリがたくさん必要ですが、今度の改築にも何とか保存したいと思います。

今の寺の建造物は、御承知のように入りバチを伏せたような低い建て方ですが、江戸の強風に備えるためには、低い屋根で柱を多く使う必要があつたのだそうです。

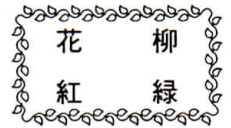
前号にも、ちよつと触れましたが、寺の入り口にあつた大きな老松が目標になって、寺の名よりも「松の木寺」で通りました。慶應義塾の野球の元老で、「時事新報」の営業部長だつた神吉さんが、同校の野球監督だつたころ、よく龍源寺で合宿したそうです。綱町のグラウンドが近くにあつたからです。選手達は坐禅をしたり、時には、その老松に「首つり」があると、それにさわつて「ハラをきたえた」由。

当事、いかに閑静であつたか想像できます。戦後、古川の上流

にあつた工場が全部戦災に遭つたため、川の流れがよく澄んで、子供たちが楽しそうに水遊びをしていました。それを思えば、数十年前にアユがすんでいたのもほんとうでしょう。その川は今ではドブ川となり、松は煙害で枯れました。そして高速道路が走り、五〇メートルのじゅんかん路線がつきぬけ、地下鉄も予定されています。

前号に記しましたように、現在地に移建されてから二百六十九年になりますが、この間のいろいろな天災には幸い難を逃れてまいりました。たびたび江戸の街を焼き払つた大火にもあわず、関東大震災にもひどく傾きましたが倒壊することなく、去る大戦にも空襲をまぬかれました。たくさんの震災の避難者や戦災の罹災者が、長い間、仮寓の生活ができたのも先人のおかげです。(つづく)

〔竜源寺報〕第八号 昭和四十年三月五日発行より抜粋〕



孟蘭盆會を迎えます。▼高額の御寄付をいただきました、新庄初枝様・後藤千恵子様・泊龍子様に深く御礼申し上げます。将来のお寺のために大切に使用させていただきたいと思います。

▼五月二十八日に、姫路の龍門寺住職・河野太通老師を導師に迎え、泰道師哲明師、松原志ずの七回忌法要を龍源寺本堂にて、日本全国から約六十名のご住職に御出頭いただき厳修致しました。哲明和尚の七回忌は、来年が正当ですが、一年早い法要となりました。▼副住職時代から、福岡県の長性寺住職・野口善敬師の指導のもと訳注作業をしていた中国・元の時代の禅僧である中峰明本の『山房夜話』の訳注本を先代住職・先々代住職の霊前に捧げることができました。『山房夜話』の訳注作業を開始したのは平成十四年十月のことであり、平成二十一年七月までに、一応の完成を見ましたが、松原家では、葬儀が続き、延び延びになって、出版が今日に至りました。勉強の機会を与

えてくれた、哲明和尚に感謝しております。▼母は茶道の先生・民生委員と活躍中です。最近、少し膝の痛みなどを抱えており、通院する日が多くなりましたが、気持ちはいつも元気でいてくれています。七回忌の法要が終わり安心していきます。妻、亜矢は、会社の仕事と龍源寺の仕事を両立して、がんばっております。本誌の「龍源寺の歴史についての」打ち込み作業を手伝ってくれています。龍源寺の歴史も少しずつ解ってきたようです。弟二人も元気にしており、二番目の仏母寺住職は、五月二十八日に家族みんなでアメリカから焼香にきてくれました。三番目の正福寺住職は、一週間前から龍源寺に法要のお手伝いに来てくれました。禅の会の有志の方々も、当日の廊下の拭き掃除、境内の掃除、下足番など、自発的にお手伝いに来ていただきました。また、母の茶道の社中の皆様など、多くの方々にお世話になりながら、いまだ御拝眉の機会を得ていない方々もいらっしやると思います。ここに、深甚

なる御礼を申し上げます。▼お檀家様で、お葬式をだされる場合、僧侶がいらないとお葬式ができないゆえに、まず、一番はじめに龍源寺にお電話を入れていただきたいと思います。葬儀社も信頼のある葬儀社を紹介させていただきます。丁寧な仕事で皆様に喜ばれています。渋谷区広尾にある東北寺内龍源寺墓地・合同船は、墓地の継承者を気にしなくてもよい永代供養塔です。龍源寺の規則を守っていただければ、どんなでもこのお墓を使用できます。最近、墓地の改葬が増えているようです。又、若干ですが、墓地もございます。▼七月十日、午前十一時より、孟蘭盆會の法要を厳修致します。新盆の方をはじめ、ご家族でお参りください。旧来から棚経に伺わせていただいている御檀家様には、前もって、お参りの日時を記したハガキを郵送させていただきます。▼七月九日・十三時より、ちらし寿司のお野菜の刻みを行います。お手伝いいただける方、宜しくお願い申し上げます。